

## 初挑戦

12月8日、文京スポーツセンターで第11回太田雄貴杯フェンシング大会が開催されました。私たち子ども記者は、リオデジャネイロオリンピック男子サーブル代表の徳南堅太選手と、太田雄貴・日本フェンシング協会会長にインタビューしました。（高2/K・S）

## フェンシング

子ども記者のインタビューを受ける徳南堅太選手



## 素早い決断力が大事

初めてフェンシングを体験しました。テレビで見たことはあり、とてもかっこよく、楽しみにしていました。ルールは簡単で「剣で相手を突く」だけでした。実際にやってみると素早い決断力が必要で、迷っているとすぐに突かれてしまいました。でも、相手がどんな動きをするのか心理戦でも考え、素早く動くのが面白かったです。（小6/福田心美）

## 自分を信じ もっと上手に

## 楽しいが一番

徳南選手に取材しました。「リオオリンピックの出場選手を決める大会でガチガチにきんちょうしましたが、勝って自信になりました」と話してくれました。自信があれば何でも楽しくなります。楽しくなれば、もっと練習する。練習をすれば、さらに自信につながります。自分を信じることは、上達につながると思います。（小5/水島希）

## 起源は「戦争」

フェンシングは意外とつくのはむずかしかったです。けれどついたらすごくうれしかったです。つかれてもあまりいたくありませんでした。フェンシングはもともとは「戦争」などからうまれたそうです。だから「今日死ぬかもしれない」というかごでやっているそうです。そしてすごく頭を使い、相手のうごきを予想してついたりします。ルールもむずかしくなく、たのしいスポーツで、すごくおもしろいことがわかりました。（小4/大迫輝）

## 剣道との違い

ぼくはけん道を習っていて、体験する前はフェンシングもけん道と同じようなスポーツかなと思っていましたが、そこまでにたスポーツではありませんでした。なぜなら、けんも全くちがうし、けん道は切るかんじだけ、フェンシングはつくようなかんじだったからです。でもフェンシングは楽しかったのでまたやってみたいです。（小4/内田悠太）

## 団体戦の勝利

体験会でスマートフェンシングを体験しました。相手より先にさきにぼうをどうたいにあて、先に3刺取った方が勝ちというゲームで、とても楽しかったです。とくなん選手に試合で一番うれしいしゅんかんをきくと「特にうれしいのは団体戦で勝ったとき。よろこびをみんなでわかちあえる」と答えてくれました。（小5/坂本史奈）

## アスリート魂

フェンシングにおける「アスリート魂」を太田会長、徳南選手に聞きました。太田会長は、練習を重ね、本番にやり残したものが無いようにする▽自分自身を知り相手を知る——との答えでした。徳南選手は、ベストを出すためにたくさん練習し、コンディションを一番良い位置に持ってくる、でした。全力を尽くす重要さを知りました。（中1/尾崎由佳）

## 選考に英語試験

太田会長に代表選手選考における英語民間試験の導入にどんな思いを込めたのかを質問しました。「大会の開催地などでのコミュニケーションに困らないようにするため」、そして「選手引退後の教養になるから」という答えでした。（高2/K・S）



体験会では、子ども記者が徳南選手に挑んだ

## やり残しなしで

ぼくは空手をやっています。試合をする時に、相手を研究したり、体調、やり残したことがないことが大事とわかりました。空手の試合をする時、これを大事にやりたいと思います。また、スポーツがうまくならない時、勉強もいっしょにやったほうが、力をはっきできることがわかりました。フェンシングをやってみてきつくてつかれることがわかりました。けれど、勝った時は気持ちいい。（小4/今津利康）

## 達成感と喜び

フェンシングを実際に行っていると、相手がどこから、どのように攻めてくるのか、予想するのがむずかしかったです。だから点をとれたときには、大きな達成感を感じることができました。団体戦で行うと、勝ったときの「達成感」と「喜び」というものをみんながわかち合うことで、この気持ちが倍になったような気がします。（小5/M・U）

徳南堅太選手、太田雄貴・協会会長にインタビュー